

二〇一八年度入学試験問題 (第二回)

国語 (五十分)

【注意】

- 一 この試験の問題文・設問は、1ページから14ページに印刷されています。
- 二 解答は、すべて別の「解答用紙」に記入しなさい。
- 三 文字は、正しくきちんと書きなさい。
- 四 、。 「」はそれぞれ一字と考えなさい。

次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

優人(ユージン)は、六年生のある日から学校へ来なくなった。
 僕(コペル)はずっと気になっていたその理由が、当時の担任の教師のせいだったと優人から聞かされる。

杉原先生のことを考えると、いつもバックには太陽が明るく照りつけている、ってイメージが浮かぶ。若くて元気がよくて、いつも創意工夫とやる気にあふれていた、青春学園ドラマの主人公になりそうな先生だった。ちょうど学校が郊外にあったから、僕たちは大風を作って上げたり、近くの川で水車を作ったりしたものだ。そういうことを企画し、先頭に立って指導していたのはいつも杉原先生だった。熱血漢であるあまり、我が道を突っ走るきらいはあったけれど、意地の悪いところなんかはなかった。それは誓っていい。

そんな杉原先生が、いったいユージンに対して何をしたというのか。

「……小さい頃、ニワトリを飼ってたんだ」

ユージンはそう呟いた。その瞬間、僕は、あつと思つた。そのニワトリのことなら、僕も知っている。ユージンがヒヨコのころから飼っていた、コッコちゃんだ。正確に言うと、ヒヨコになる前から飼っていた。有精卵で買ったのを、誰かから、それを温めたらヒヨコが生まれるって聞いて、電球やら湯たんぼやらときには自分の下着の間に入れてたりして、ユージンは苦心惨憺して温め、本当に孵ったヒヨコだったんだ。「……僕も覚えてるよ」

今までどこかで、見ないようにしていたもの、とりあえずカッコに括つて横に置いていたもの、その場所を今まさにユージンが指し示した気がした。

「杉原は僕のこと、嫌いだったんだよ、ほんとは」

え？ と僕は過去のいろんな場面を思い出そうとしたけれど、思い当ることはなかった。……コッコちゃんのこと以外は。

「気のせいじゃないのか」

ユージンは激しく首を振った。

「気のせいじゃない。僕みたいにいちいちうじ考え込むタイプは、生理的に受け付けないんだ、あいつは」

「でも、それを言うなら、僕だって」

いちいち考え込むタイプ、というなら人後に落ちるものではない、と自負している。

「コペルはまだ、可愛げみたいなのがあるんだよ。皆に、愛すべきやつ、って思われるような」

なんだよ、それ。僕はむっとした。

「意識して媚びてたつもりなんかないけど」

「媚びるとか媚びないとかの問題じゃないんだよ。生まれついでのものなんだ」

そんなふうに言われたら、反論のしようがないじゃないか。

「だからきつと、軍隊に入ったとしてもうまく生き抜いていけるよ」

ここでもう、ちょっと相当カチンときたけど、ユージンが次に、

「でも僕は無理だな」

って言ったとき、ああ、そうだ、ユージンには絶対無理だ、と素直に思えた。それと較べれば、自分の方がまだ、そんなところでも適応力がありそうな気がした。なんて言うんだろう、ある種の鈍さか。こういうの、健康的って言うんだらうか。いや、違う。でもこれについては後日また改

めて考えることにしよう。

「……おやじとおふくろの離婚がいよいよ決定的になったとき、最初おふくろは僕と妹を連れて出ていくつもりだったんだ。持っていくもの、置いていくもの、考えているうちに、ニワトリをどうしよう、ってことになった。あんな、うるさく闘をつくるオンドリなんか、町中のマンションには連れていけない。そうだ、学校で飼ってる動物の仲間にしてもらえたらと思いついた。僕もそれなら毎日会えるし、いいか、と思った。それでおふくろが学校へ連絡した。校長は二つ返事でオーケーした。おふくろは僕に、ニワトリを学校へ持って行かせた」

(中略)

これは、ユージンが、自分自身の記憶から再構成して語った、「そのとき何が起こったか」だ。

「ニワトリを玄関の横につないで、職員室に行ったら、杉原がいたんで、コッコを連れてきました、って言ったんだ。え？ と最初はわけが分かんない様子だったけど、僕が、学校で……と言いかけたら、ああ、分かった、君が飼ってたニワトリを学校がもらうことになったんだな、と、頷いた。考えればその言い方が、すでに少しずれて

いた。でも間違いじゃないから、そうです、って返事すると、じゃあ、預かっとかから、君、教室に入ってたさ、って言われた。その通りにした。そうしたら、朝の職員会議が終わって、教室に入ってきた杉原は、いきなり、『今日の総合学習では、食べ物がどこから来るかということとを勉強したいと思う。たとえばトリ肉は、最初からパックに入っているわけではなくて……』って言い出した。いやな予感がした。『今、そこにある命が、自分の命を支えてくれる、自分の血や肉になるという体験をしてもらいたいと思う。昔、家で飼っているニワトリをつぶして食べるっていうことは、ごく普通のことだった。だからこそ、食べ物にも自然と感謝の気持ちがあったんだ。先生は以前から君たちにもそういう体験をしてもらいたいと思っていたんだ。命が繋がっていく、ということ。ちょうど今日、優人が自宅で飼えなくなったニワトリを持ってきてくれた。もし、優人が許してくれたらだけれど、つぶして、料理する、ってことをやってみないか』。血の気が引くって、ああいうときのことを言うんだろうな。杉原は自分の『斬新で本質をついた教育』に興奮して目がきらきらしていた。みんなも、ええーって言いながら、退屈な授業が、な

んかとしてつもなく刺激的なものに変わり、ふだんはタブーそのものの、『殺し』の場に居合わせられるっていう、非日常的な事態に動揺し、それを、僕ははっきりと断言するけど、『興奮して楽しんでた』。コペル、おまえもそうだったはず。いや。責めてるんじゃないよ。そのことを認めてほしいとは思ってるけど。

とにかく、僕は、みんなのためにニワトリを教材として提出すべきだと期待されていた。クラス中の無言の圧力を感じた。

僕は、教材にするためにニワトリを飼っていたんじゃない。い。

その一言が、どうしても言えなかった。僕がずっと黙っているの、杉原は苛々した。

『さっき、優人のお母さんに連絡したら、そういうことからニワトリも本望でしようって言うてらしたぞ』。杉原のその一言がクラスのムードに追い打ちをかけた。僕は、それで、僕は、とうとう最後に領いたんだ。自分の気持ちとは関係なく、体がそう動いたんだ。自分でないみたいだった』

そうだ、僕も覚えてる。え？ え？ って驚いてるうちに、ことはどんどん進んでいった。いやだ、やめてほしい、と泣き出す女の子もいたっけ。でも、ユージンはただ黙っていた。いいのかよ、いいのかよ、と僕は半信半疑でそこにいた。異を唱えようにも、杉原先生の言い分は、いかにも理にかなっているような気がした。ただ、どこか、何かを無視したような強引さで進んでいく気がしたけど、どこがおかしい、というのを指摘するだけの力が、僕にはなかった。「何かがおかしい」って、「違和感」を覚える力、「引っ掛かり」に意識のスポットライトを当ててる力が、なかったんだ。「正論風」にとうとうと述べられると、途中で判断能力が麻痺してしまう癖もあった。

けれど、ユージンが自分なりの判断でそうするというのなら、それはそれですごい自己犠牲のように思えたり、また、ああいうことって、「本当に大切な、知っておかなければならないこと」のような気もしたのも事実だ。「命が繋がっていくこと」なんて言われると。

ユージンはそれからコッコちゃんの首を切ったり、吊るして血を抜いたり、解体したりっていう作業に、積極的に

までは言わないけど、冷静に対処しているように見えたから、よく分からないながら、そんなものかな、と思っ
てしまったんだ。僕自身、よく知ってたコッコちゃんがそんな目に会うのを見るのは、本当はつらかったけど、飼主のユージンが我慢して
るんだから、って自分に言い聞かせた。これは、何か、大事なことに繋がっているはずなんだから、と。

ああ、なんて馬鹿だったんだろう。

ちよつと考えれば分かることじゃないか。

コッコちゃんをブラキ氏だと思えば。

「ユージン」

かけた声がかすれてしまった。

「今、僕は、全然気づかなかった、ごめん、って言おうとしたんだ。でも」

僕はちよつと躊躇した。とんでもないことに気づいたんだ。こんなこと、口にしていいんだろうか。

周りの景色が、すっかり色を失った。自分の心臓が血液を体中に送り出している、その鼓動が、内耳にまで達して

じんじんと響ひびいている。

いや。

言わなくちゃ。

僕は大きく息を吸って、吐はいた。

「僕はあるときずっと、声がかげられなかったんだ、君に。ということは僕はやつぱり、気づいてたんだ。分かっていたんだ、君の気持ちを」

自分の声が自分でないようだった。それ以上続けられなくて、しゃがみ込み、片手で額ひたいを押さえた。

僕は心の中で続けた。

……そして、あそこにいた人間の中で、君がどんなにコッコちゃんを可愛がっていたか、僕ほどよく知っていた者はいない。僕は、裏切り者以外の何者でもないじゃないか。

そうだ。

僕は軍隊でも生きていけるだろう。それは、「鈍い」からでも「健康的」だからでもない。自分の意識すら誤魔化ごまかすほど、ずる賢がしこいからだ。

これが、僕が長い間「カッコに括くわつていたもの」の正体

だったのだろうか。

しばらく辺りはしんとしていた。鳥さえず声を立てなかった。やがてユージンが身じろぎをする音がして、隣となりに腰こしを下ろし、両手で膝ひざを抱だくのが見えた。

「だからおまえは、『愛すべきやつ』なのさ」^H

もう何を言われても、僕に怒おこる権利はないように思われた。

(中略)

ユージンは改めて思い出したのか、しばらく黙っていた。そしてため息をつき、地面に腰を下ろしたまま膝ひざに回まわっていた両手を後ろにつくと、前方の一点を見つめながら、また淡々たんたんと話を続けた。

「ニワトリはその日、唐揚げからあげや炊き込みごこご飯やさまざまに調理された。けれど僕は手をつけられなかった。杉原はそれを見ていた。次の日、給食が終わった後、杉原は僕のところに来て、さつき君が飲んだスープは、昨日のあのニワトリのガラから採ったものだよ。これで、あのニワトリは、君の一部になって永遠に一緒に生きていくんだよ、って、例の安易じことうすいな自己陶酔じことうすいの中で、すごい真理を教えるようにさ

さやいた。でも、本人のそういう『熱血先生ぶり』とは裏腹に、自分で意識しているのかわからないのか、悪趣味ないはずらが成功したかどうかを舌なめずりしながら僕の反応を見ている、そういうレベルの低い好奇心ではち切れそうなのが分かった。僕はすぐに吐いた。鼻の奥がジンジンした。吐きながら思った。

なんでこんなことになったのか。

僕は集団の圧力に負けたんだ。

*ばあちゃんじゃないけれど、「あれよあれよという間に事が決まっていって」その勢いに流されたんだ。

僕を信じて付いてきた、あのニワトリを守り切れなかった。生きて、固有名詞で呼んでいたニワトリ、僕が名前を呼んだらいつも顔を上げて、それから、何ですかっていう返事のように、顔を横に傾けて見せていたあのニワトリが、モノになって分解されて目の前に並べられたときのことは、一生忘れない。

僕も集団から、群れから離れて考える必要があった、*米谷さんのように。

しみじみそう思って、決行したのがそれからしばらく経ってからだから、あれがまあ、学校に行かなくなっ

た理由だなんて、誰も分らなかったと思う。誰もまた、¹分りたくなかっただろうし」

ユージンは、この間ずっとコッコちゃんのことを「ニワトリ」と呼んでいた。

もう「コッコちゃん」とは呼べないのだろう。」

（梨木香歩『僕は、そして僕たちはどう生きるか』による）

【注】

*熱血漢——熱意のある男性。

*きらい——傾向。

*苦心惨憺——非常に苦勞すること。

*鬨——朝を告げる鳴き声。

*ブラキ氏——コベルの飼っている犬の名前。

*ばあちゃん——ユージンの祖母が以前に言った言葉。

*米谷さん——戦時中、兵役を拒否して洞穴に一人で隠れ

ていた。

問一 — 線部A「人後に落ちるものではない」の意味として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 他人と比べて、劣ることがないこと。

イ 他人と比べて、勝ることがないこと。

ウ 他人と比べて、特別なことがないこと。

エ 他人と比べて、無視することができないこと。

問二 — 線部B「僕はむっとした」とあるが、それはなぜか、説明しなさい。

問三 — 線部C「言い方が、すでに少しずれていた」とあるが、その「ずれ」とはどのような点か。ユージンと杉原の言い方を比べて答えなさい。

問四 — 線部D「クラスのムード」とあるが、ここでの同じ意味の言葉を文中から五字で抜き出して答えなさい。

問五 — 線部E「ただ、どこか、何かを無視したような強引さ」とあるが、その「何か」とは何か、最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 大切に飼っていたコッコちゃんを提供するユージンの気持ち。

イ 本質をついた教育とは何かという問題に対する杉原の気持ち。

ウ いやだ、やめてほしいと言って泣き出す周りの女の子の気持ち。

エ 本当にニワトリを犠牲にしているのかという半信半疑の僕の気持ち。

問六 — 線部F「そんなもの」とはどのようなことか、説明しなさい。

問七 — 線部G「とんでもないことに気づいたんだ」とあるが、何に気づいたのか、文中から一文を抜き出し、はじめの五字を答えなさい。

問八 — 線部H「だからおまえは、『愛すべきやつ』なのさ」とあるが、ユージンがコペルを「愛すべきやつ」と言ったのは、どういう点においてか、百字以内で説明しなさい。

問九 — 線部I「誰もまた、分かりたくなかった」とあるが、それはなぜか、説明しなさい。

問十 — 線部J「もう「コッコちゃん」とは呼べないのだろう」とあるが、それはなぜか、最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 中学生にもなってニワトリをコッコちゃんと呼ぶことに、コペルに対して恥ずかしさをおぼえたから。
- イ もう死んでから時間のたっているニワトリをコッコちゃんと固有名詞で呼ぶことに違和感があるから。
- ウ コッコちゃんと呼ぶと、犠牲にしたものが愛情をかけた生き物であり、それを見捨てたことになるから。
- エ 飼っていたときから時間がたち、卵から孵したときのようににはニワトリに対して愛情を持っていないから。

二

次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

皆さんは毎朝、皆さんの学校までの道のりを歩いてくる。大抵は友達と一緒ににぎやかに歩いてくるのかもしれない。だが遅刻して一人で登校する日もあるだろう。「自分はずいぶんこの学校に通っているのだろう。どうして勉強しなればならないのだろう」なんて思いながら。立ち止まって振り返ると、遠くに拡がる緑豊かな風景が眼に入ってきたりする。青空が広がっていたり、鳥がのびのびと飛んでいたりする。耳を澄ませば、路傍の草むらから虫たちの声が聞こえてくるだろう。その光景の中で一人、皆さんはこんなふう思ったかもしれない。

「世界があり、その中で僕は生きています。けれども、あの鳥と僕はどこか違う。鳥は、だれにも妨げられず自由に空を飛んでいる。しかし自分は制服を身にまとい、学校へ向かわなければならぬ。どうしてあの鳥のように、自由に生きられないのだろうか」と。

自分と世界の関係が、鳥が空を飛んでいるようにはびつたりと感じられない。ほんのわずかな、しかし自分ではどうしようもない宿命的なズレ。自分がこの世界にいるとい

うことがとても不思議な、奇妙なことに思えてくるのだ。

同時に強い孤独感が押し寄せてくる。周りには家族も友達も、学校の先生たちもいるが、「自分一人でここに生きている」という感覚だ。知らないふりをしてはいけな
い。よく思い出してほしい。感じた覚えがきつとあるはず。こうした感覚は大人になると失われてしまう。けれども実はこの感覚こそ、学ぶことの根柢に触れている証しであり、あらゆる未来の「種」を生み出す起点にほかならない。

鳥は、本当に自由なのだろうか。私はそうではないと思う。鳥はいわば空の中に閉じこめられている。魚も同様で、水の中に閉じこめられている。鳥は空を「空」とは呼ばず、魚も水を「水」と名づけることはない。人間がするようには自分の住む世界を①タイプシヨウとして捉えることがないからだ。人間は言葉を用い、空を「空」と呼び、海を「海」と名づけた。いわば世界と自分をはっきりと分けて認識している。その意味で人間は、世界に閉じこめられてはいない。言い換えれば人間は、鳥や魚と同じような意味では「自然（＝世界）」の中に生きていない。おそらくこのこと

が、人間、とりわけ若い皆さんが世界と自分との間にズレを感じる理由だ。

重要なことは、このズレがあるからこそ、人間はほかの動物のように自足することができず、自分が生きる世界を絶えずつくり替えていかなければならないということ。例えば、森を切り拓き、田畑をつくる。これこそ人間だけが持っている自由であり、人間が自由である証しなのだが、見方を変えれば、その自由に閉じこめられているともいえない。人間は、自分が生きている世界と自分との間に越えがたいズレを感じながら、(孤独ではあるけれども)自由に、世界を学び、世界を自分に合うようにつくり替える努力を積み重ねてきた。それが歴史ということ。私たちは今、その結果としてこの世界を生きているのだ。

「1」現代において、人間が行っている世界づくり替えは、あまりにも高度でフクザツだ。例えば、地下鉄を通したり、ジェット機を飛ばしたりしているが、そのために何が必要かを上げてみればわかる。まず、言葉を知らなければならぬ。世界の仕組みを理解してキジユツするには、数学がなければならぬ。物理学も工学も欠かせない。いくつものことを積み重ねて、ようやくジェット機が

一機、空を飛べる。

そうした数学や物理学、工学は、自然そのものではなく、人間が自然を学びながらつくり出した体系であるから、学ぶことには二段階あることになる。星の運行から暦をつくり、めぐる季節の知識を生かした耕作や狩猟を行うなど、自然を学ぶことが第一段階だとすれば、自然を学んだ人間がつくり出したものを学ぶことが第二段階だ。現代を生きる我々には、この「二重の学び」が宿命づけられており、この第二段階のために特に必要とされているのが学校ということになる。

人間がつくり出したものは数えきれず、一人では到底学ばきれない。人間は学ぶべきことを増やすぎたのではないかと思うほどだ。研究分野の細分化も近年ますます進行している。例えば、脳の「海馬」という部分を研究している脳科学者の知人がいる。人間は何かを学ぶたびに海馬の最深处で「新生ニューロン」という神経組織を生成している。知人はこのメカニズムを研究しているのだが、同じ研究に取り組むチームは世界におよそ一〇〇チームもあり、日々成果を競っているという。

「2」、何をやるにせよ勉強して覚えるべきことは多い。新生ニューロンに限らず、何か新発見をするほどの研究者になりたいのであればなおさらだ。しかし知識量で勝る者が強者かという点、現実はそのようになっていない。実は新発見というものは、発見者が一五〜一六歳の頃からその種を自分の中に宿していることが多い。つまり、あなたたちの年になにかの「種」が宿されるということ。これは分野によらない。このことが端的に示しているのは、世界を変える力は知識ではなく「若い力」だということだ。若い力とは「知らない」力であり、「知っている」ということよりも「知らない」ということのほうが重要なのである。

理由の一つが「エラー」、つまり「失敗」する可能性だ。膨大な知識の体系に分け入った若者は、それを骨髄化しようとするとき、誤った理解をすることもしばしばある。物事は、教えられたとおりに学ぶとは限らないからだ。新発見は、それまでの常識からすればエラー、あるいはアクシデントと呼ばれる事態の中でなされることが多い。人間が何かを成し遂げる力は、エラーにこそある。生物としての人類もそうやって進化してきたはず。突然変異というエラーを利用して環境にテキオウし、生き残ってきたの

だから。歳をとると失敗を恥じるようになり、エラーを起こせなくなっていくが、エラーを恐れてはならない。若さとは、弱点であると同時に世界を変えていく力でもあるのだ。

物理学者のある友人は、高校で教わった「虚数単位」が大人数になってもずっと頭にひっかかっていたという。虚数単位は1の平方根だと説明されても「よくわからない。気持ち悪い。なんかおかしい」という思いを、彼は長い間、頭の片隅に置いておいた。三〇年後、彼はその虚数を利用してまったく新しいタイプの電子顕微鏡を発明するのだが、皆さんの年頃に抱いたほんの少しの違和感と疑問を持ち続け、それが花開いたのだという。

「知らない」ことは大きな力にもなりうる。エラーをする可能性はおおいにあるが、それは、誰も考えつかなかったことを行う可能性でもある。学校では「間違えてはならない」という雰囲気形成されがちだが、それは世界を変える力を逆に失わせてしまうことになるかもしれない。

何かを学んでいこうとするとき、「好き」という感覚ほど強い味方はない。一方、「嫌い」という感覚は、学びにブ

レーキをかける。好きなことはいくらでもできるが、嫌いなことはやりたくない、と。加えて、好きや嫌いという感覚は個人的な感覚だから、誰かに「私はリンゴが好きだ」と言ったとしても、「それは君が好きなだけ、僕はバナナが好きだ」と返される場合が少なくない。好き嫌いは何かをブロックしてひとりよがりな世界を生み出すことがあるのである。

しかし、内面でわき起こる好きや嫌いは、大切にしなければならぬ。それが人生をつくっていくのだから。だが何かを本当に学ぶためには、好き嫌いの感覚を、さしあたり停止して、どうして好きなのか、どうして嫌いなのかを正視しなければならぬ。矛盾むじゆんしていると思うだろう。

問一——線部A「こうした感覚」に最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア どうして勉強しなければならぬのだろうという感覚。
- イ 鳥のようにのびのびと自由に空を飛びたいと思う感覚。
- ウ 自分が存在することを不思議に思い、自分は一人だと思ふ感覚。
- エ どうして制服を着て、学校に行かなければならぬのだろうという感覚。

しかし、数学の勉強が嫌いなら、どこが好きでどこが嫌いなかを考えてみてほしい。考えることが、単なる好きや嫌いの感覚から距離きよりを置くことを教えてくれるから。それが学ぶことの第一歩。今のうちにその術すゑを身につけてほしい。好きだから、嫌いだからで終わってはいけない。

(小林康夫「学ぶことの根拠」による)

【注】

- *路傍——道ばた。
- *自足——自分で満足すること。
- *骨肉化——技術や教えを自分のものとして活かすこと。
- *虚数——現実には存在しない想像上の数。

問二 — 線部B「鳥や魚と同じような意味では「自然（＝世界）」の中に生きていない」について、

(i) 「人間」が「鳥や魚」と絶対的に違うことは何か、解答欄に合うように文中から二十字で抜き出しなさい。

(ii) また、そのために必要なものは何か、文中から漢字二字で抜き出しなさい。

問三 — 線部C「人間だけが持っている自由」とあるが、それは何か、解答欄に合うように答えなさい。

問四 「 1 」、「 2 」にあてはまることを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア さて イ しかし ウ だから エ たしかに

問五 — 線部D「人間が何かを成し遂げる力は、エラーにこそある」とあるが、それはどういうことか、最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 常識があつて真面目に努力した人間が新発見をするということ。

イ ものごとを知らないという若さが新発見につながるということ。

ウ 普通の考えからはずれた出来事の中で新発見がされるということ。

エ たくさんの知識を身につけるときに誤った理解をするということ。

問六 — 線部E「それが学ぶことの第一歩」とあるが、筆者の意見をふまえて、**あ・な・た・の**「学ぶことの第一歩」について説明しなさい。

問七 — 線部X「未来の「種」とは何か、またその「種」がどうなるというのか、説明しなさい。

問八 — 線部①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

